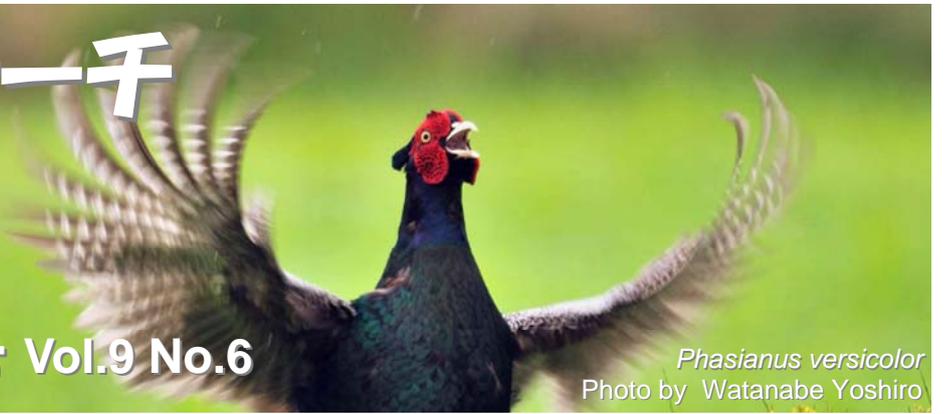


バードリサーチ ニュース

2012年6月号 Vol.9 No.6



Phasianus versicolor
Photo by Watanabe Yoshiro

活動報告

金環日食で鳥のさえずりが活発に？

植田睦之 佐藤重穂
白石健一 三田長久 斎藤馨

5月21日の金環日食は見られましたか？全国的にあまり天気は良くなかったようですが、東京では雲の切れ間から、きれいなリングになっている太陽を見ることができ、大満足でした。金環の時刻だけ雲の切れ間から太陽が見られただけに、ありがたさもひとしおでした。



Photo by Yamaguchi Yasuhiro
写真. 金環日食 in 筑波.

2009年7月22日の皆既日食では、森林総研の関さんがトカラ列島中之島で、鳥たちが鳴きやみ、夜行性のリュウキュウコノハズクが鳴き出したことを報告しています(関2010)。金環日食は皆既日食と異なり、太陽すべてがおおわれる訳ではないので、夜のようになるわけではありませんが、やや暗くなり、朝日のような赤い光が射してきたのが見られました。このような光量や光の質の変化は鳥のさえずり活動に影響を与えたのでしょうか？

そこで、4月号のニュースレターで募集を行ない、埼玉県秩父の2地点、高知県市の又、熊本県立田山の3地点、熊本県御船町で録音を行ない、それぞれの場所の日食のピーク時間帯の10分間について、その前後2日ずつ、計5日間の聞き取りをして、日食の日とそれ以外の日を比べてみました。当日雨が降ってしまった御船町を除く地点では、日食の効果と思われるさえずり頻度の上昇がみられましたので、ご報告します。

あら、また夜明け？さえずらなくちゃ！

まず比べてみたのは、全種のさえずり頻度の合計とさえずっていた種数です。10分を1分間隔に10個の時間区分に区切り、ある種がその時間区分に1回でもさえずっていたら1とし、その総合計をさえずり頻度としました。

すると、すべての調査地で、金環日食になった5月21日のさえずり頻度が高かったことがわかりました(図1)。さえずっていた種数でみても、立田山の1地点は、日食の前日の種数と同じ種数でしたが、それ以外の5地点では金環日食の日にもっとも種数が多く記録されました。

では、何の鳥がその違いを生み出しているのでしょうか？秩父の調査地で、アカハラのさえずり頻度が高かったり、コ

ノハズクが鳴いたりといった特筆すべき記録がありました。全体で見ると、「この種が良く鳴いた」というわけではなく、全体的にさえずり活動が活発になった結果、このような結果が現れたということのようでした。

日の出前に活発にさえずる種、日の出後に活発にさえずる種、ずっと活発にさえずっている種などさえずり頻度の時間変化は様々ですが、全般的に言えば、日の出前にもっとも活発になり、その後、だんだん不活発になってきます(図2)。金環日食が見られた7時半あたりは、もうすでにさえずりが不活発になっている時間帯です。この時間帯に、やや暗くなり、日の出頃のような色の光が射してきたことにより、再びさえずりが活性化したのかもしれませんが。ただ、トカラで同様の記録を取った関伸一さんの話では、金環日食日の21日と、23日の比較では、以上のような傾向は見られなかったそうです。今回のように、金環日食の時間帯だけの比較ではなく、日の出からのさえずり頻度の時間変化を記述し、それを金環日食の日とそれ以外の日と比べるなど、もう少し解析をすすめて、さらに日食の影響を検討していけば、日食の影響についてしっかりと示せるかもしれません。

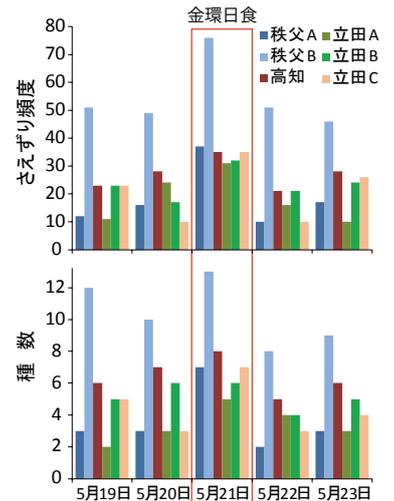


図1. 金環日食のピークの10分間に鳥がさえずっていた頻度と種数の日食の日とその前後の日との比較。さえずり頻度は、各種鳥類がさえずっていた時間(分)のべ時間として示した。

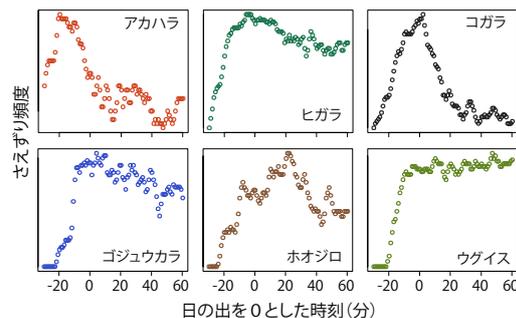


図2. 種によって異なる日の出時刻とさえずり頻度との関係。2012年の秩父と志賀のライブ配信の聞き取り調査にもとづく。

引用文献

関伸一. 2010. トカラ列島における皆既日食で観察された鳥類の音声行動の変化. Bird Research 6: A1-A11

レポート

亀の甲より年の功？ ダイトウメジロの対捕食者戦略！

大阪市立大学大学院理学研究科 堀江明香

日本を含め、東アジアでは年配者を敬う思想が生活の中に根ざしています。これは、年配者の豊富な経験や知恵といった「年の功」への敬意でもあります。ヒト以外の生物でも、様々な行動に年齢による違いがあることが知られていますが、その解釈はヒトと同じ、とはいえないようです。

私は卒論生の中からメジロの研究を始め、大学院では沖縄県大東諸島に生息するダイトウメジロを対象に調査を続けてきました。私のテーマは、親が巣内の子の捕食をどのように回避しているか、その対捕食者戦略の詳細です。ここでは、ダイトウメジロで見られた対捕食者行動のうち、巣場所選びについてみられた「年の功」についてご紹介します。

年齢と共に向上する繁殖成績

何年も繁殖を繰り返す生き物では、年齢と共に残せる子供の数が多くなる現象がよく知られています。この傾向は鳥類でも普遍的で、Sæther (1990)によると、35種中、実に32種の鳥で、年配個体の方が若年個体より多くのヒナを残していました。なぜ、年配の個体の方が多くのヒナを残せるのでしょうか。現在、そのメカニズムは3つの仮説にまとめられています (Forslund & Pärt 1995)。まず1つめはSelection仮説。これは繁殖能力の低い個体は生存率も悪く、淘汰されやすいという仮説です。ヒナを残す能力の低い個体が早く死ぬことで、年配の個体中には能力の高い個体の割合が高くなります。2つめはRestraint仮説、つまり「抑制」仮説で、若いうちは繁殖に全力投球せず、年配になるほど繁殖に多くのエネルギーを投資するという仮説です。繁殖に多くのエネルギーを投資すると生存率が減少することが知られているので、若いうちは生き延びること優先、残りの生涯が少なくなるにつれて生存より繁殖に多くのエネルギーを投資するという仮説です。そして3つめがConstraint仮説、これは、若い個体は繁殖能力に何かしらの制約を受けており、年を経るごとに能力が向上していくという「年の功」仮説です。年齢と共に向上する能力としては、エサ採り能力、抱卵能力、ペア相手との「コミュニケーション」能力などが候補に挙がっていますが、個体追跡による直接的な検証はほとんどありません。

これら3つの仮説はいずれも様々な種で検証が試みられています。しかし、主に議論されてきたのは一腹卵数などの生産性への年齢効果でした。ある年に残すことのできたヒナの数、もちろん卵の数にも依存しますが、産んだ卵の生存率にも依存します。年配の個体ほど卵やヒナの生存率がよいという報告例もそれなりにあるにも関わらず、そのメカニズムに目を向けた研究は驚くほど少数です。

ヒナを守る親鳥の行動

ヒナを無事に育て上げるには、いくつかのリスクを克服しなければなりません。卵やヒナを失う理由には、①受精失敗、②孵化失敗、③托卵、④餓死、⑤捕食の5要因

が考えられます。このうち、最も普遍的に起こり、最もダメージが大きいのが捕食です (写真1)。スズメ目の小鳥では、捕食が繁殖失敗の主要因だと考えられており (Martin 1993)、捕食者は多くの場合、繰り返し巣を襲ってすべての卵やヒナを捕食してしまいます。そのため、私は捕食回避への年齢効果に着目しました。つまり、年齢の高い個体ほど捕食にあいにくいのではないかと考えたのです。捕食を回避するために、親鳥は様々な対捕食者行動を発達させていますが、私はまず、営巣場所選択への年齢効果を調べてみることにしました。



写真1. クマネズミに捕食されたメジロの卵。

ダイトウメジロ

沖縄本島から東へ約360km、太平洋に浮かぶ大東諸島は、他の陸地と一度もつながったことのない海洋島です。ダイトウメジロ (写真2)はこの亜熱帯の島々に固有の亜種で、巣の捕食の研究に適した特徴をいくつも持っています。まずは、繁殖失敗原因の98%が捕食であること。風雨による巣の落下はみられず、ヒナの餓死も観察されていません。繁殖失敗の主要因は、クマネズミとモズによる捕食で、捕食率は全巣の約30%です。また、捕食者に見つかれば必ず巣内の卵とヒナ全てが食べられてしまいます。次に、一腹卵数に個体差が少ないこと。ダイトウメジロでは90%以上の巣で一腹卵数が2卵か3卵であるため、卵数の影響をそれほど受けずに、巣立ち雛数への捕食の影響を調べることができます。繁殖期が1~7月と長く、その間に同じペアが2~5回もの繁殖を試みることも、各個体の営巣場所を詳しく調査できるメリットです。



写真2. ヒナに給餌するダイトウメジロ。

私は、ダイトウメジロの繁殖成績が両親の年齢によって異なるかを調べ、そのメカニズムを捕食回避への「年の功」という観点から明らかにすることを目標にしました。メジロは羽色での年齢査定が難しく、個体の年齢を調べるのは容易ではありません。正確な年齢を知るには、幼鳥の頃から追跡を続ける必要があります。私は、多くの個体をカラーリングで標識し、各個体の繁殖を経年的にモニタリングすることで、年齢と繁殖の対応関係を検討しました。

子育てに大切なのは父親の年齢

繁殖成績は様々なパラメーターで測られます。私は6つの繁殖パラメーターについて解析を行い、1歳と2歳以上の親鳥の間に繁殖成績の違いがあるかを調べてみました (表1)。まず注目すべきは、一腹卵数や1シーズンでの繁殖回数といった、「産んだ数」にメス親の年齢効果がみられなかったことです。このような傾向は冷温帯の鳥では非常に稀です。ダイトウメジロは亜熱帯に生息するため、繁殖期が長く餌も豊富にあることが予想されます。そのため、1歳の若

レポート

鳥でも何度も繁殖を試みることができるのでしょ。繁殖開始のタイミングには雌雄どちらの年齢も効いており、年配の親ほど早く繁殖を開始していましたが、今の段階ではどのような意味があるのかまだよく分かりません。少なくとも、早く繁殖した個体ほど何度も繁殖したり、雛数が多いような傾向はありませんでした。

様々なパラメーターで測られる繁殖成績ですが、中でも最終的に巣立たせたヒナの数は非常に重要です。ダイトウメジロでは、年齢の高いオスほど営巣成功率(繁殖を試みた回数のうち、ヒナを巣立たせることができた回数の割合)が高く、1シーズン中に多くのヒナを巣立たせていました(表1)。ダイトウメジロの繁殖失敗原因は主に捕食ですから、年齢の高いオスは捕食にあいにくいことが分かります。卵数や繁殖回数には年齢間で違いがないことから、どうやらダイトウメジロでは「たくさん産む」とより「無事に育てる」ことがヒナを残すための最重要課題であり、そのためにはオス親の年齢が重要だと分かりました。

表1. 繁殖成績の年齢差を雌雄別に示す。値は平均値、括弧内はサンプル数。年齢間で有意(p<0.05)な差があるパラメーターを赤い網かけで示す。Horie & Takagi (2012) を改変。

繁殖パラメーター	オスの年齢		メスの年齢	
	1歳の若鳥	2歳以上の成鳥	1歳の若鳥	2歳以上の成鳥
繁殖開始タイミング (1巣目初卵日)	4月5日 (21)	3月18日 (36)	4月7日 (9)	3月11日 (20)
一腹卵数	2.52個 (27)	2.79個 (53)	2.58個 (19)	2.76個 (38)
1シーズンの繁殖回数	3.25回 (12)	3.13回 (32)	3.00回 (9)	3.41回 (17)
成功繁殖回数	1.25回 (12)	2.30回 (32)	1.80回 (9)	2.05回 (17)
営巣成功率 (成功巣数/営巣回数×100)	39.6% (12)	77.3% (32)	60.0% (9)	62.7% (17)
1シーズンの 総巣立ち雛数	2.92雛 (12)	6.30雛 (32)	4.30雛 (9)	5.74雛 (17)

安全な巣場所選びには経験が必要？

ダイトウメジロにおいて、捕食にあった巣と、孵化と巣立ちに成功した巣との違いを調べてみると、巣の隠ぺい率(隠れ度合い)と巣高が関係していることが分かりました。周囲から見えやすいと卵もヒナも捕食されやすく、巣が低いと卵捕食にあいやすくなります。捕食にあいにくかった年配のオス親は、どのような巣を造っていたのでしょうか。オス親の年齢を3グループに分け、それぞれの年齢群での隠ぺい率と巣高を示したのが図1です。隠ぺい率と巣高はオス親の年齢と共に高くなっており、年配のオス親ほど巣場所選びに長けていることが分かりました。ちなみに、メジロの仲間ではオスが巣場所を決めると言われています。メスの年齢と巣場所に有意な関係はありませんでした。

次に重要なのが、オスの年齢に伴う巣場所の違いが同一個体でもみられるかどうかです。これを調べないことには、巣場

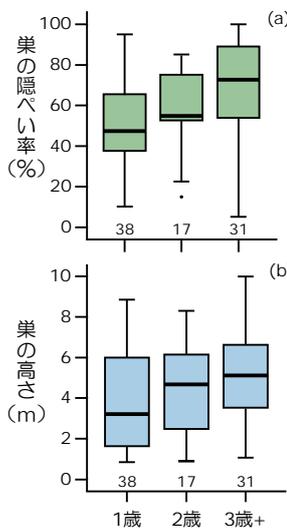


図1. オスの年齢によって異なる巣形質。(a) 巣の隠ぺい率、(b) 巣高。Horie & Takagi (2012) を改変。

所選びの下手な個体が早く死んでしまうのか、年齢と共に巣場所選び能力が向上するのか分かりません。1歳の時の繁殖履歴が全て分かっている個体のうち、翌年まで生き延び、さらに2歳のときの繁殖履歴も全て把握できた個体は7個体しかいませんが、その解析結果は「年の功」仮説を大いに支持してく

れました。図2はその7個体が1歳の時と2歳の時とで、巣の隠ぺい率、巣高、営巣成功率、1シーズンに巣立たせた雛数を比較したものです。ほぼ全ての個体で、2歳になると1歳のときより捕食にあいにくい場所に巣を造り、営巣成功率がよく、多くのヒナを巣立たせるようになっていました。どうやら、ダイトウメジロは年齢を重ねると、安全な場所に巣を造れるようになるようです。さらに、同シーズン内での繰り返し繁殖に着目し、捕食にあった後と巣立ちに成功した後で、巣場所の変え方を比較してみたところ、捕食された後の方が成功した後よりも巣高も隠ぺい率も高くなる傾向がありました。この結果だけではまだ不十分ですが、ダイトウメジロのオス親は前回の繁殖成否に応じて次の巣の場所を決めている可能性があり、何回もの繁殖経験を経て捕食にあいにくい巣場所を学習するのではないかと私は考えています。

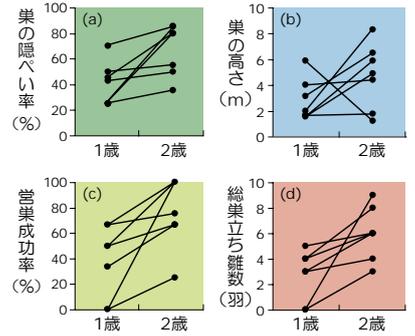


図2. 同じオスを2年間追跡した時の巣形質・繁殖成績の向上。(a) 巣の隠ぺい率、(b) 巣高、(c) 営巣成功率(成功巣数/営巣回数×100)、(d) 1シーズンの総巣立ち雛数。Horie & Takagi (2012) を改変。

年齢効果、さまざまなメカニズム

以上のように、ダイトウメジロでは卵やヒナを捕食から守る能力の個体差が繁殖の明暗を分けており、オス親は繁殖経験を通して次第に巣場所選択スキルを上げていくようです。しかし、たとえ同種であっても他地域のメジロに同じ事が起こっているとは限りません。生き物は生息環境に応じて異なる選択圧にさらされます。餌不足がヒナの主要な死亡要因となっている場所もあるでしょうし、そのような場所では餌採りの下手な個体はヒナを残す能力も生存率も低く、年齢依存的な繁殖成績向上にSelection仮説が当てはまるのかもしれない。いずれにしても、繁殖成績が年齢と共に向上するメカニズムは種や生息環境によって全く異なると予想され、まだまだブラックボックスが多いのが現状です。

引用・参考文献

Forslund, P. & Pärt, T. 1995. Age and reproduction in birds - hypotheses and tests. Trends Ecol. Evol. 10: 374-377.
 Horie, S. & Takagi, M. 2012. Nest site positioning by male Daito White-eyes *Zosterops japonicus daitoensis* improves with age to reduce nest predation risk. Ibis. 145: 285-295.
 Martin, T.E. 1993. Nest Predation and Nest Site. BioScience 43: 523-532.
 Sæther, B. 1990. Age-specific variation in reproductive performance of birds. Curr. Ornith. 7: 251-283.

ヒメアマツバメ 英: House Swift 学: *Apus affinis*

1. 分類と形態

分類: アマツバメ目 アマツバメ科

全長: 約15cm 自然翼長: 12.7 ± 0.4 cm (n= 611)
 尾長: 4.9 ± 0.2 cm (n= 889) 体重: 28.8 ± 2.5 g (n= 2623)
 ※全長はChantler & Driessens (1995), それ以外は堀田ほかによる計測値。

羽色:
 雌雄同色. 全身黒褐色で, 喉と腰が白い。

鳴き声:
 「ジュリリリリ」, 「チュリリリ」などと鳴く。



写真1. ヒメアマツバメ. [Photo by 佐藤信敏]

2. 分布と生息環境

分布:
 世界的には, アフリカ中南部, モロッコやチュニジアなど北アフリカ, インド, ネパール, バングラディシュ, 中国南東部, 東南アジア, フィリピン北部, 台湾, 日本など熱帯や亜熱帯を中心に生息している。最近の研究では, 日本を含むネパール, バングラディシュ以東のものが, インドやアフリカなどに生息するものに比べ, 尾羽が少し長くわずかに燕尾であること, 全体に黒色味が強いことから別種として扱い, 前者をHouse Swift *A. nipalensis*, 後者をLittle Swift *A. affinis* としている。日本にはもともと生息しなかったが, 1960年代に鹿児島県種子島, 鎌倉市, 高知市などで観察されるようになり, 1967年に静岡市で初めて繁殖が確認された。その後は関東以南の太平洋岸を中心に分布が拡大し, 留鳥として局所的に生息している。集合性が強く, しばしば数百羽にもなる集団繁殖地や集団ねぐらを形成する。

生息環境:
 主に平野部の市街地やその周辺に見られる。

3. 生活史



日本では, 繁殖期は4月中旬から12月初旬までで, その間, 同調して2回から3回繁殖する。1回目の産卵日が4月中下旬, 2回目が7月中旬, 3回目が9月下旬から10月初旬。3歳以上のメスは2歳のメスよりも早く産卵する。1回目と

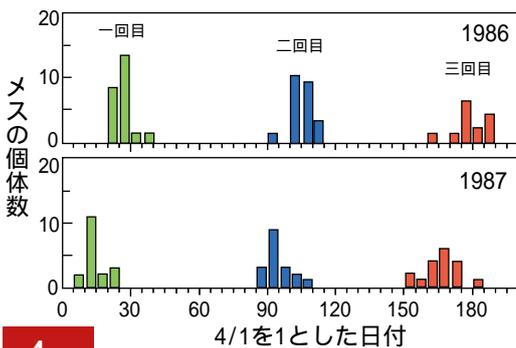


図1. 1986年と1987年にヒメアマツバメのメスが最初の卵を産んだ日のヒストグラム。

2回目ではほぼすべてのペアが繁殖するが, 3回目の繁殖については3歳以上のメスの6割強が繁殖を試みたのに対し, 2歳のメスでは4割弱であった(Hotta 1996)。一夫一妻で繁殖し, 抱卵やヒナへの給餌も雌雄で同等に分担する。

巣:
 雌雄共同で, 空中で羽毛や植物の葉, 茎などを採集し, それらを唾液で貼り付けて半球状の巣を鉄筋コンクリートづくりの建造物の底下などにつくる。造巣期間は著しく長く, 1歳のペアで約5か月, 2歳以上のペアで約2か月かかる。このように最初から巣をつくると時間がかかることから, ある場所にヒメアマツバメが定着する場合, イワツバメやコシアカツバメの古巣を利用することが多く, コロニー内に利用可能なツバメ類の古巣がなくなると, 新たに定着する個体は自分自身で巣を造る。巣は繁殖のために使用するほか, 周年を通してつがいのねぐらとしても利用すること, 造巣にかなりの時間がかかることなどから, 本種にとって重要な資源である。



写真2. 4巣からなるヒメアマツバメの集合巣(上)と20巣以上からなる集合巣。上の写真の壁には一部土が残っており, コシアカツバメの古巣を利用してできたものだとわかる。

卵:
 一腹卵数は2~4卵であるが, 繁殖時期やメスの年齢によって有意に異なる。2歳のメスでは1回目の繁殖が平均3.3卵, 2回目が2.4卵, 3回目が1.9卵, 3歳以上のメスでは1回目が3.6卵, 2回目が2.9卵, 3回目が2.0卵であった(サンプルサイズは2歳24雌, 3歳以上72雌)。

抱卵・育雛期間, 巣立ち率:
 孵化成功率にメスの年齢や季節に差は見られないが, 巣立ち成功率は3回目の2歳のメスで有意に低かった。抱卵日数は約20日, 育雛日数は36~51日と長い。



写真3. 落下したヒメアマツバメの巣の内部と巣内ヒナ。この巣はコシアカツバメの古巣を利用して作られている。内部は羽毛などでしっかり裏打ちされていることがわかる。

4. 食性と採食行動

空中を飛びながら, 上昇気流に吹き上げられたカヤハエ, 羽アリなどの飛翔性昆虫を捕る。巣からかなり離れたと

ころからヒナに餌を効率よく運ぶために、口の中で捕った虫を唾液で固めてボール状にして、一度に多くの虫を運ぶ。フードボールを持って帰ってきた親は、喉がふくらんでいるのですぐにわかる。一つのフードボールの湿重量は0.3~1.6g、平均0.8gであった(n=50)。一回目の繁殖の時に運ばれるフードボールの重さは2回目、3回目の時よりも有意に重かった。11個のフードボールを分析したところ、その中には9~447匹の昆虫類などが固められていた。昆虫類とクモ類の10目35科からなり、そのうちの17科(48.6%)はハエ目であった。フードボール毎に含まれる餌動物の種類は大きく異なり、同じ日に採集されたものでも違いが見られた。例えば、同じ日に採集した3つのフードボールのうち2つではミズアブ科の1種が80%以上を占め、残りの一つではウンカ科の1種が50%以上を占めていた。

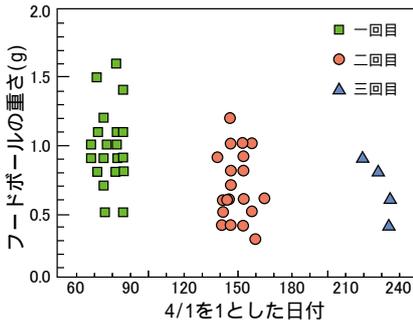


図2. 繁殖回数によるフードボールの湿重量の違い。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 離婚と子殺し 良い巣や年齢の高い配偶者をもとめて

ヒメアマツバメの配偶関係は永続的な一夫一妻であり、一年を通じてつがい関係を維持する。特に、高年齢の配偶者とつがい、完成度の高い巣を所有する個体は相手が消失しない限りつがい関係を維持する傾向が強いが、離婚もおこる。離婚がおこる最も一般的な状況は、完成度が高い巣を所有する高年齢のつがいの一方が消失(死亡)した場合である。完成度の高い巣で、残された年齢の高い個体とつがうために、巣を所有しないか、造巣途中の巣を所有し、配偶者の年齢が若い個体は積極的に離婚する。このように積極的に離婚し、良い巣や年齢の高い配偶者を得た個体は、翌年の繁殖期に、より多くのヒナを育てることが可能になる。

つがい相手の消失(死亡)や乗っ取りにより、新しい個体が繁殖中の巣を獲得した場合、置換した個体や侵入した個体はその巣の卵やヒナを殺した。配偶者はいるが造巣途中のような繁殖できない巣を所有している両性の個体がおこない、子殺しを行った個体はその巣の異性とつがうことができ、より早く繁殖を開始することが可能になる(Hotta 1994)。

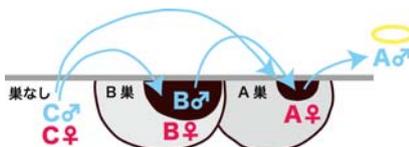


図3. 離婚や子殺しがおこる一つの例。A巣は入口が小さく完成しているが、B巣は入口が大きく、まだ完全にはできていない。コロニーには、つがいCのように巣を所有していないものもいる。その時に、A巣のオスが死亡した場合、A巣と残されたAメスを獲得するために、BオスやCオスは配偶者と離婚する。もしA巣が繁殖中で卵やヒナがいた場合には、置換したオスは彼らを巣から追い出す。

● 集団繁殖地のその後

日本野鳥の会静岡支部では、1981~1983年に静岡市・焼津市周辺のヒメアマツバメの分布状況を調べ、17カ所の営巣地を確認し、ある営巣地では254羽も生息していた。しかし、2011年にその17カ所の営巣地を再調査したところ、それらすべてでヒメアマツバメは確認されなかった。ヒメアマツバメは、建物や橋などコンクリート製の人工物建造物に巣をかける。建物は定期的な補修があり、耐用年数をすぎれば取り壊される。17カ所のうち3カ所では建物が取り壊され、5カ所では建物が改修されていた。個体数の多い集団営巣地では10年以上も継続利用されることもあり、長期的に利用されている集団繁殖地ほど建物の補修や取り壊しにあり可能性は高くなると考えられる。ヒメアマツバメは、市街地や観光地の建物にしばしば営巣する。巣は一年中繁殖やねぐらのために利用されるため、数多くの個体が住むコロニーでは、鳥たちが排泄する糞は相当な量になり、かれらの声もかなりの騒音になる。定着当初は珍しさもあって、巣が落とされることも少ないが、長期にわたってそのような状態が続くと反対に敬遠される傾向にあるようだ。

6. 引用・参考文献

Chantler, P. & Driessens, G. 1995. Swifts: A Guide to the Swifts and Treeswifts of the World. Pica Press, Sussex.
 del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. (eds) 1999. Handbook of the Birds of the World. Vol. 5. Barn-owls to Hummingbirds. Lynx Edicions, Barcelona.
 Hotta, M. 1994. Infanticide in Little Swifts taking over costly nests. Anim. Behav. 47: 491-493.
 Hotta, M. 1996. Timing of Laying in Multiple-brooded Little Swifts *Apus affinis*. Jap. J. Ornithol. 45: 23-30.
 堀田昌伸 2012. ツバメ・モノグラフ:ヒメアマツバメ. BIRDER 26(5):17.
 堀田昌伸 2012. ツバメ質問箱:Q5 ヒメアマツバメはいつから日本にいるのですか?今、どのくらい分布広がっていますか?. BIRDER 26(5): 37.
 中村登流・中村雅彦 1995. 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 保育社, 東京.
 日本野鳥の会静岡支部 1983. 静岡市周辺におけるヒメアマツバメの生息状況. Strix 2: 59-66.

執筆者

堀田昌伸 長野県環境保全研究所自然環境部

長野ではヒメアマツバメを見る機会はなく、逆にアマツバメを良く見かけます。アマツバメの良い調査地はないか探しているのですが、まだ見つかりません。たまに静岡県や愛知県を訪れた時に空をみあげてヒメアマツバメは飛んでいないか探します。昨年、調査地のコロニーを訪れましたが、鳥の出入りに窓ガラスがはられ、巣はきれいに落とされていました。



イベント情報

サイエンスカフェを鳥類研究でも

知り合いの若手研究者が、ちょっと楽しそうな団体を立ち上げて活動を始めたので、自己紹介をしてもらいました。
【高木憲太郎】

● Liferbird「鳥のサイエンスカフェ」始動！

Liferbird(ライファーバード)は鳥類研究の発展と社会への発信を目的に、若手の鳥類研究者が中心となって設立した団体で、今年度から地道に活動しています。

今、もっとも力を入れているのは「鳥のサイエンスカフェ」です。サイエンスカフェとは、お茶を飲みながら研究者の話やシンポジウムや講演会よりも気軽であることが注目され、近年各地で開催されています。私たちが目指しているサイエンスカフェは、誰でも気軽に参加できて、鳥にあまり興味がない方でも楽しんでいただけるものです。そのためにいくつか工夫をしています。

その1つが会場です。大学などの公共施設ではなく、おしゃれな喫茶店で開催しています(写真1)。また、支障のない程度でBGMを流しており、コーヒーなどの飲み物も提供しています。もう一つの工夫として、授業のように一方的にならないよう、語り手だけでなく、聞き手を交えておこなっています。このようにすることで質問をしやすい雰囲気を作り出しています。



写真1. サイエンスカフェの様子。会場は池袋にある喫茶店「Lamp」です。



Liferbirdのロゴマーク。

● Liferbirdの鳥のサイエンスカフェ

第1回目は「究極の詐欺師:カッコウ」をテーマにLiferbirdのメンバーで聞き手と語り手となり、カフェを開催しました。ここではカッコウの「托卵」について、全く知らない方からかなり詳しい人まで楽しんでいただけるように、基本的な内容をじっくり紹介するとともに、最終的には最新の研究まで、

様々な映像を交えて紹介しました。また、専門用語などは極力避けて話すように心がけました。

講演後はお客さんとLiferbirdのメンバーで、会場の喫茶店で昼食会をしました。ここでは発表者に直接質問できる、聞きにきていただいた方からの感想を直接聞ける、いろんな人と交流できる、などの利点もあり、とても楽しいひとときとなりました。

その後も鳥のサイエンスカフェは月に1回開催しており、ツバメ、オオセッカをテーマにそれぞれの専門の研究者を招いて1時間ほど話してもらいました。

● 次回は三上修さんによるスズメの話

次回は7月22日(日)に岩手医科大学の三上修さんを招いてスズメの研究についてわかりやすく紹介して頂きます。お時間があれば是非ご参加ください。会場は池袋駅メトロポリタン口から徒歩10分のところにある喫茶店「Lamp」です。席に限りがございますので、メールにて予約も受け付けております(席があれば予約なしでもご参加いただけます。)。また、詳細はウェブでもご覧になれます。

まだまだ試行錯誤の段階ですが、温かく見守って頂ければ幸いです。どうぞ宜しくお願いします！

【Liferbird 北村亘】

■ LiferbirdのWebサイト
<http://liferbird.com>



写真2. 喫茶店「Lamp」前でスタッフの集合写真。

● 次回の鳥のサイエンスカフェ

テーマ：スズメ研究のスズメ
講演者：三上修(岩手医科大学)
日時：7月22日(日) 11:30~(11:00 開場)
費用：600円(1ドリンク付き)
定員：18名
場所：喫茶店「Lamp」
東京都豊島区西池袋4-2-13 1F
(池袋駅メトロポリタン口から徒歩10分)
予約：下記アドレスまでメールでお願いします。
info@liferbird.com